

防衛大学校本科第16期学生及び理工学研究科第9期学生
卒業式における学校長式辞（昭和47年3月20日）

本日、防衛大学校本科第16期学生及び研究科第9期学生の卒業式に、佐藤内閣総理大臣^{注(1)}、船田衆議院議長^{注(2)}、河野参議院議長^{注(3)}、江崎防衛庁長官^{注(4)}をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄各位の御臨席をえましたことは、卒業生はもとより、防衛大学校にとりまして無上の光栄と存じます。教職員と学生一同を代表いたしまして、来賓各位の御厚意と父兄各位の御熱意に対し、心から御礼申し上げる次第であります。

今日卒業の栄をにないます本科の卒業生423名は、4月から陸・海・空各自衛隊の幹部候補生学校に進み、幹部自衛官となるための教育を受けます。また研究科の卒業生61名は、陸・海・空の部隊や機関に帰り、それぞれ重要な任務につくことになっています。私はここに卒業生諸君の前途を祝福するため、はなむけの言葉をのべたいと思います。

本科並びに研究科の卒業生諸君に対して、私は何よりもまず諸君が自衛隊の立派な幹部になるため、防衛の専門家としての道に徹することを望みたいのであります。防衛の学と術とはまことに深遠でありまして、その修得と錬磨に、また研究と開発に諸君が今後どれほど努力されましても、決して十分ということはありませんまい。防衛の専門に徹することは、男子の一生をかけるにもっともふさわしい仕事といえましょう。諸君が防衛の専門家として、第一級の能力を身につけるのでなければ、わが自衛隊は将来抑止力及び対処力としての機能を満足に発揮できなくなるおそれがあります。万一そのような事態となれば日本国は主権と独立を失い、わが国民は内外の破壊的勢力によって支配されることになりましょう。わが防衛大学校が20年前、わが国の独立回復とほぼ同時に発足していることをあらためて想起し、使命感を持って防衛の学と術とをきわめていた



第3代学校長 猪木 正道

注(1) 佐藤榮作

注(2) 船田^{なか} 中

注(3) 河野謙三

注(4) 江崎真澄

だきたいのであります。

本科卒業生の諸君が防衛大学校で学んだのはあくまで基礎中の基礎であります。この意味で本科卒業生にとって本日の卒業式は、防衛の専門家としての出発点にほかなりません。諸君が久留米、江田島あるいは奈良において本校の卒業生としてはずかしくない立派な成績を示すことを期待します。

研究科の卒業生諸君は、防衛の科学技術について一段と高度の研究をされたわけですが、研究が進むにしたがって、防衛の科学技術が無限の可能性を含んでいることを痛感されたはずであります。本科の卒業生も研究科の卒業生も防衛の専門家として今後ますます高度の能力を身につけるに伴い、人間の能力の限界を知り、いよいよ謙虚になるものと私は確信します。使命感に燃え実力に富み、しかも謙虚な防衛の専門家となることこそ諸君が国民から尊敬をうけ、日本国の平和と安全に寄与する所以であります。

次に防衛の専門家としての道に徹底することの裏付けとして、諸君が専門家としての倫理的責任感をしっかりと身につけることを期待します。諸君は自衛隊の幹部として、将来、陸・海・空の各種の部隊を指揮統率する地位につくはずであります。今日の防衛力は本来侵略に対する抑止力ではありますが、物理的には巨大な破壊力でもあります。この破壊力を直接操作する立場にある自衛隊の幹部は、防衛の専門家としての高度の職能倫理に貫かれているのでなければ、その重大な責任を果すことはできません。

かえりみますと、本科卒業生諸君が小原台上に学んだ期間の後半、すなわち研究科の卒業生諸君が在学した2年間は、日本国をとりまく国際環境が激変した時期でありました。わが国の国力は充実し、沖縄県の本土復帰は、去る3月15日^{注(5)}の批准書交換によってめでたく確定いたしました。その反面にわが国力の躍進を喜ばぬ人々から種々の非難や中傷が加えられております。国内におきましても、国際緊張の緩和を口実として、防衛力の必要性そのものを否定するかのような論議さえ行われています。しかし国際関係が緊張している場合にかぎって、防衛力は必要不可欠であるという考え方は、根本的に誤っています。日本国の安全を脅威するものは、決して特定の国家群でもなければイデオロギーでもありません。人間の心に獣性と魔性が宿っているかぎり、防衛力なくしては平和を確保することは不可能です。声高く平和を唱える人々の中に残忍きわまりないものが含まれていること、反戦を叫ぶものの中に好戦的なものが少なくないことを思えば、日本国の平和と安全を守る自衛隊の存在がいかに尊厳なものであるかは、あらためて証明されたものといわなければなりません。

防衛大学校本科及び研究科の卒業生諸君が、今後たえざる研鑽を通して防衛の専門家としての実力をたくわえ、防衛の専門家としての使命感と責任感をいよいよ強く深くすることを期待して、私の式辞を終わります。

注(5) 昭和47年(1972年)3月15日